

一譚靈英羅茶曼廻術呪  
一伝流轟

英雄の卓食

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

※この作品は Fate / Grand Order Cosmos in the Lost belt 地獄界曼荼羅平安京に関するネタバレが少しあります。

血風荒ぶ凄絶無惨の儀式、天覧聖杯戦争。

悪しき術師の野望はカルデアのマスターと平安の猛者達によって完膚なきまでに叩き潰された。

別れの言葉を告げ、後は世界が修正されるのを待つのみだったが、観測できない何処かの明日へと分岐した。

そこは、呪霊と呼ばれる魔性が蔓延る辺獄。

あの戦いを終えた金時に、恐れるものは何もない。繋いだ明日へ。いつか繋がる明日の先へ。あの時の約束を胸に、サーヴァントとして召喚された金時達の新たな戦いの狼煙があがる。

# 目次

明日の先の話

---

1

## 明日の先の話

『こちらが先日発見されたという、あの紫式部の日記です。欠損や落丁はほぼ無いよう  
で、大変貴重なものとなります。内容を把握次第、国の重要文化財に追加される様です。  
その内容ですが——』

「これこれ！このニュースよ！」

ある高校の一室。眼鏡をかけた女子高生が己がスマホを掲げ、同室内にいる二人の男  
子生徒に話しかける。

「紫式部の日記？あー、確かにそんなニュースあつた様な……。でもどうしたんすか？そ  
れってオカルトってよりは歴史研究とかじゃ？」

椅子の背もたれに顎を置く、ツーブロツクの生徒が問いかける。それを予期していた  
かのか、女子生徒はこのニュースについて有志の人が翻訳したスレッドを開く。

曰く、度々登場する鋼の怪。これは大柄な武者とも捉えられるが、描写が可笑しく、あ  
る所では怪異として書かれながらも、紫式部の一人称では親しみのある何かとして記さ  
れており、最期には光の粒子になったのだという。

これだけならば、よくある悲劇の別れの話にも思えるが、他にも鬼の姿が細かく記さ

れていた。坂田金時や源頼光等、源氏の武者達も登場している。

一般公開されている中で読み取れたのはそこまでであったのだが、当時の書物に書かれている事で、源頼光女性説や、蘆屋道満及びに坂田金時が実在の人物という声上がり、一部の界限では更に沸き立った様相を見せていた。

「ン、ン、ツッ！」

「お、おう、虎杖、急にどうした…？」

急に吹き出した事を疑問に思ったもう一人の男子生徒が声をかける。虎杖と呼ばれた少年は大丈夫と返し、次の言葉を待つ。

「いい？これは当時の市井とか情勢にもしつかり触れられて、専門家も信憑性はかなり高いって言ってるの。つまり、これを信じるなら、平安の街には本当に鬼がいて、それと武者達が争ってたって事になるのよ！」

興奮したのか頬を蒸気させる女生徒にを宥めるように男子生徒は言った。

「いや、それは俺も見たが…前半は兎も角後半は創作物語の案を書いただけであつたが。…それに、そんな鬼やらは前から乗ってたからなあ」

その言葉に女生徒はガックリと項垂れる。

「もお〜！そんなの分かつてるのに！ちよつと位夢見させてよ！」

「あの、やつぱり、こういうのは定番の都市伝説とかどうでしょう？こ、コックリさんと

か」

「……やるー！」

わいわいと2年生で盛り上がる中、虎杖は一人心中で胸を撫で下ろす。

(あー、びつくりした。コレがバレたのかと思つた。他の人も持つてるって話だったけど、もしかしたらつて事もあるらしいな……)

握りしめた服のその下、その胸元。右と左に三つずつ、都合六つの刻印は、これから起こる出来事を予見するかの様に仄かに赤く輝いていた。

「じゃつ、先生。俺用事あつから。ナイススローイング」

少しばかり時は過ぎ、グラウンド。啞然とする生徒教師を置き去りに、オカ研の二人と話し込む。

(凄いなアイツ。呪力なし素の力でアレか。……禪院先輩と同じタイプかな……)

それを眺める影が一つ。明らかにこの学校の生徒ではない、虎杖と同年代に見える黒髪の男。その視線は周囲の生徒とは毛色が違い、まるで珍しい動物を見るような目。さも当然と言う訳ではないが、異常な身体能力に対する反応としてはあまりに薄い。

そんな彼に注視する生徒など居るはずもなく、やがてまた趣向の違うざわめきが蔓延

する。

「ねね、あれ誰かの知り合い…？」

「うわっ凄えガタイ…」

「イケメンと美女だな…」

「う、羨ましいっ…！」

その元凶は校門前に留まる二人の人物。

かたや190cmと大柄な体格に加え、神が手ずから造形したかのような肉体美。まさに天性の肉体と形容するに相応しい体を持つ金髪的美丈夫。

その人物は校門前で大きく手を降っており、如何にもな厳つさを持つが、不思議と萎縮はしない明るさを持ち合わせていた。

もう一方は、女性にしては高めの身長を持ち、墨のような美しい漆黒の頭髮、出るところは出て引つ込むところは引つ込んでいる、まさに理想のスタイルの女性。

恐ろしい程の美貌も兼ね備えており、大和撫子の要素を寄せ集めれば、この女性になると言われても違和感すら持たないだろう。

そんな彼女、かけているエプロンが不思議な程によく似合い、一部生徒を幼児退行させていた。

「おーい！大将！」



「あ、金ちゃん！頼光さん！」

「「お前かよ?!」」

この一連の流れについて見入ってしまったが、その男は、自らの使命を今一度思い浮かべる。

（いや、こんなことしてる場合じゃねえ。さっさと呪物を――）

「迎えに来てくれるなんて、何かあったの?」

（呪物の気配！明らかに今強くなった!）

「オイお前!――つて、早すぎんだろ!?!」

男子――伏黒恵は咄嗟に反応するが、その時にはもうかなり遠くまで行っており、引き止める声は届かなかった。

「アイツ50m3秒で走るらしいぞ」

「車かよ」

「いや、平然とそれについてけるあの二人もナニモンだよ」

「さあ?」

ある病室に、一人の老人が横たわっている。一見普段どおりの元気をを見せている

が、見る人が見れば死期が近いと分かるだろう。

老人の他には虎杖の姿しかなく、言うまでもなく、彼岸に近いこの老人は、虎杖悠仁の祖父である。

「悠仁、お前の両親の事だが「いいよ興味ねーから」……………」

最期にかける言葉、それを放とうと口を開けば、ぼつさりと切り捨てられる。これには思わず真顔になる。

「お前の！両親の！事だが！」

「だから興味ねえーって。死ぬ前にカツコつけようとすんのやめてくんない？」

「オ…オマエ…！」

いつも通りに、お互い譲らずに口喧嘩をする始末。はたしてこれが最期の会話だとは誰が思うだろうか。

「…悠仁」

「んー？」

話を切り替えたかったのか、それとも悟ったのか、背を向けたままに悠仁に話しかける。

「オマエは強いから人を助けろ」

「手の届く範囲でいい。救える奴は救つとけ。迷っても、感謝されなくても、とにかく助

けてやれ」

「爺ちゃん……？」

「オマエは大勢に囲まれて死ぬ。俺みたいにはなるなよ」

そう言うのと、瞳を閉じて沈黙する。待てども待てども物音一つしない、痛い程の静寂は、悠仁の心に死というものをハッキリと浸透させていく。

「……爺ちゃん……」

悲しみに暮れる心を何とか鎮め、看護師に知らせようと扉に手をかける。

「それと！」

「うのわっ?! い、生きてんのかよ! ビックリさせんなって!」

思わぬドッキリを仕掛けられ、オレの純情を返せと訴える悠仁を視界に収めず、ただ虚空を見つめて言った。

「そのの二人。悠仁を、バカ孫を頼みます」

「は? 爺ちゃん、見えて……」

真剣に、そこにあるものとして扱う祖父。どうやらまぐれでも無いようで、じつとその一点を見つめ続けている。

観念したのか、二人が粒子を纏いながら病室へと姿を現す。

「……本当に気づいてたみてえだな」

「ですが……」

「あア……。んーと、大将の爺ちゃんよ。アンタ、今彼岸と此岸の間にいるぜ」

金髪の男、坂田金時はやや言いづらそうに告げる。しかしそれも分かっているとばかりに頷くと、どこか穏やかに昔話を列ねていく。

曰く、悠仁には友達が少ないとか、頭が悪いとか。とにかく、いい事、悪い事、どうでもいい事まで時系列を問わずに語っていく。

「あらあら、そんな事が……」

「やめろって！そんなんガキの頃の話だろ!」

久しぶりに、本当に久しぶりに笑い合えた二人。なんの変哲もない家族の団欒は、唐突に終わりを告げる。

「コフツ」

「爺ちゃん！……死ぬ、のか……?」

分かっている。頭ではそうだと分かりきっている。何より、自分よりも遥かにそういつたことに詳しい彼等が、それが薄氷の上に成り立つ空元気だと言っていたではないか。

さつきまでは何とも思ってたが、今度こそ現実味を帯びた死の予兆。

途端に心に暗雲が立ち込め、行き場のない不安と焦燥が胸中に渦巻く。

「……………」

「アホ、ジジイ一人見送るのに何て顔してやがる。そんなんじや妻に先立たれた時が恐ろしいわ」

黙りこくる悠仁に、フツ、と緩んだ顔で微笑みかける。

「さつきはな、人を助けるって言ったがよ。やつぱ、アレは無しだ。勿論、出来る範囲では助けるよ?」

「…は、はあ? 何だよ、それ。結局、どっちなんだよ」

「いいか。これから先、オマエが挑むのはぜえーんぶ戦いと言ってもいい。大学受験、テスト、就職。他にも、やりたいこと、やらなきやいけない事があるだろ。そんな時に大切なのは実力じゃあねえ。戦う理由だ。自分が戦う理由さえ定めちまえば、どんな事があってもその芯を貫けるってモンだろ」

「……………!!」

反応を待たないまま、いや、既にもう目も耳もマトモに機能していない。この男、本当に根性だけで喋っている。

「爺ちゃんっ……!」

「ああ、仁。オマエの子供はまだまだ半人前で……」

「ピ」

無機質な音声が木霊し、今ここに一つの命が消えた。

虎杖は立ち上がり、今度こそ病室を後にする。

『はい、どうされました？』

『…虎杖さん？』

「爺ちゃん死にました」

その声は震えていて、弱々しかったが、迷いも未練も無かった。

ただ、少しだけ泣きたくなかった。

「なあ、大将よ…。その…よ」

「ん？」

坂田金時は思い出す。決して忘れられないあの戦争を、あの明日の先から訪れた、異邦の友人達を。

『戦う理由！』

——俺がマサカリ振るうのは、何の為か！』

『何でもない毎日を生きる、』

数多の連中みんなのために！

オレは！ オレの戦いくさを続けてやらあ！』

「大将の爺ちゃん、相当にゴールデンだったぜ」

「ッ……!!」

その後、虎杖から漏れる呪力の残穢を追ってきた呪術師、伏黒恵によって両面宿儺の指の危険性を示され、学校へと向かう事となる。そこで、不意をつかれて伏黒は危機に陥るも、虎杖の乱入で難を逃れる。

如何に驚異的な身体能力を持つ虎杖とはいえ、呪力でしか攻撃の通じない呪霊には劣勢に立たされる。そこで特級呪物たる宿儺の指を飲み込み、一時的に体に乗っ取った四腕の鬼神、両面宿儺により呪霊は祓われた。

両面宿儺は雑魚狩りを終えた源頼光へ襲いかかるも、そこは源氏郎党。難なく一蹴する。

後に五条と名乗る伏黒の教師が現れ、現在の虎杖の立場や呪術界隈の話を進め、条件つきで、秘匿死刑の無期限執行猶予が認められる。

……

「呪いに遭遇して普通に死ねたら恩の字　ぐちやぐちやにされても死体が見つかればまだマシってmond」

「宿儺の搜索をするとなれば凄惨な現場を見ることもあるだろうし　君がそうならないとは言つてあげられない」

「ま　好きな地獄を選んでよ」

「……いや、俺はまだ死ねない。爺ちゃんと約束したんだ。俺は俺の戦う理由を探す。それまでは死にきれない」

「じゃ、もし見つかったら?」

「戦う理由を貫き通すから死ねない」

「ヒュウ、我儘だねえ。でも僕、そういうの嫌いじゃない。……で、そろそろその二体?二人?も説明して欲しいんだけど……」

「サーヴァント『ライダー』。源頼光。彼、虎杖悠仁の使い魔の様なものです」

「サーヴァント『バーサーカー』。坂田金時。あー、まあ、アレだ。何ともゴールデンな縁って奴で召喚された。一応本人?だけ」

事情を知らない五条悟に、聖杯戦争やサーヴァントを説明し、秘密裏にだが認められる。

「楽しい地獄になりそうだ。あ、今日中に荷物纏めておいで」

「どっか行くの?」

「東京」

坂田金時は、ワチャワチャと戯れる二人を見つめ、その後、街へと目を向ける。

道は驚く程に整備され、人々の姿は多種多様。想像すらしていない大きさの道路が続き、どこもかしこも平安京とは比べるべくも無い程に様変わりしている。



(だが、人の営みは何処までいっても変わりやあしねえ)

『アンタはアンタの世界を守れ。』

オイラは、オイラの世界のために!』

『戦うさ!』

(なあ大将。明日の先から来た相棒。こいつが、オイラ達の守った明日の先って奴だよな。…だが、な…)

(呪霊なんていう魔性が湧いてると来た。さらには今の大将にやあ鬼神までもがついていやがる)

(まだまだ戦いは続くみたいだぜ。相棒)

「誰かがオレを呼びやがる。魔性を屠り、鬼を討てと言いやがる! オレは頼光四天王が一人、主馬佑坂田金時!」

「ゴールデン!」